

# 随想

音楽好きの私にとって、海外出張の合間の楽しみは、思わぬ機会にいい演奏に出会うことである。

昨年は五月にワシントンで東アジア専門家会議があり、その前日にニューヨークに一泊して、時事通信社の「時事トップ・セミナー」で講演させていただいたが、当夜はカーネギー・ホールでデトロイト交響楽団の現代音楽（シエーンベルク）を楽しんだ。もとより、カーネギー・ホールのチケットは売り切れていたけれど、そのような場合でも諦めずに、開演直前に行ってみることである。当夜も若干のプレミアムつきではあったが、キャンセルのチケットを手に入れることができた。

こうして私は、ウィーンに着いたその日にウィーン・フィルと協演したポリニーのピアノをコンツェルト・ハウスで聴いたり、世界的なプリマ、プリセツカヤのバレエを彼女の亡命直前にポリシヨイ劇場で満喫したり、あるいは真冬のパリの小さな教会、サンテチエンス・デュ・モンでのバロックの催しや夏のザルツブルク郊外、ヘルブルン宮殿でのモーツァルトなど、楽しい思い出がいくつもある。昨秋には、モスクワで第六回日ソ円卓会議があり、最近の日ソ関係や北方領土問題をめぐる激しいやりとりのあと、リヴォフへ一泊



## リヴォフのオペラ座

東京外国語大学教授

中嶋 嶺雄 (なかじま・みねお)

の小旅行に行く機会に恵まれた。リヴォフと言っても馴染みの薄い地名であろうが、そこはソ連邦ウクライナ共和国の西端、もうポーランド国境まで約六〇キロという位置にあり、最近ようやく外国人旅行者に「開放」された人口七〇万の都市である。かつて十四世紀にはモンゴルの来襲を果敢に防いだこの地も、十八世紀の第一次ポーランド分割でマリア・テレサ治下のオーストリア領となり、ハプスブルク家の文化的影響下に入った。今日ではソ連領に併合されてしまったが、モスクワやキエフと東西ヨーロッパとを結ぶ交通の要衝でもある。街中が石畳みのリヴォフは秋の紅葉に映え、あちこちにギリシヤ正教会、カソリック教会、アルメニア教会などの古い建物が並んでいる。スターリンによる強制移住まではポーランド人が多かった都市だけに、ここがソ連かと思わせた。

その夜、私たちはオペラ劇場に案内されたが、ネオルネッサンス様式のこのオペラ座は、一九〇〇年建立とのことで、まさしくウィーンのおペラ座をそのまま少し小さくしただけと言ってよい見事なものであった。その夜は、出し物が「白鳥の湖」全幕のためか満席で、終演した時はもう夜の十一時に近かったけれど、席を立つ聴衆は一人もいなかった。